

かどわかし

2026.05.23 明石

「クジラ追っていたら我を忘れる」「セミクジラの親子は追いかけんなつつつてよ」「無我夢中やね」「生活やからね」「当たった」「それが普通」「もうええの」「してないね」「おばさんが馬鹿やから」「よーけおった」「淡々とやね」「なにくそ、って思ったらしい」「考えんかった」「あの頃やからね」「上乘ってふざけてた」「みんなお金が欲しかったもんや」「今やと考えられん」「うん、それはないね」「みんな何してるかはわかるけど」「小さい町やから」「さみしいとおもう」「もうみんななくなっていくてね」「いい人やけど、口ベタやから」

「ふりまわされたわ、ほんま」

倅の子はそう言って扉をガラガラと閉めた。

夕暮れ時だった。

暫く姿を見せなかったこいつは、いま帰ってきた。

くたびれた半袖を汗の匂いに染めて、焦点の合わない目をどこかにさまよわせていた。

「どこいっとったんや」

「東ティモール」

「どこや、それ」

「ほら、赤道の南の島」

「タヒチのあたりか」

「ぜんぜん違うわ」

上がり框に腰を下ろすと、革靴のかかをと乱雑にもう一方の足のつま先で踏んで脱いだ。片方が横を向いたまま土間に転がった。

「取引先の工場が納品を満たせへんつつつてよ、そないなこと言われても困るから殴り込みにかけてんや」

「何度言うても首を振らんから不履行解除しようとしたらよ、娘を出してきおつて。」「大学に行かせたいから」

「いうて。そんなん知らんがな」

言いながら、靴下のまま畳を踏んで入ってくる。眉間に皺を寄せて、口の端が下がっていた。

「こっちは昇進がかかつとるんやで。このプロジェクトで出世が決まるんや、停滞は許されへん」

「そやか
ら解除したらよ、その話を俺を飛び越えて本社に連絡しおつて。」

言いながら、居間の畳の上にとっかと座り込んだ。

鞆を放るように脇に置いて、片膝を立てる。

背中は丸いのに、そこだけ妙に力が籠っていた。

「おかげで上役はカンカンや。CSIだかRだか知らんけど、会社の体裁がどうかいきなり言い出してな。普段人情なんてこれっぽっちも持ってないくせにやで。そないなこと言うなら先に俺たちの給料を上げてくれやっつてな。ほんましようもない。」

「絶対あいつら話盛ったで。食わせるものがないから今にも骨が折れそうとかな。あほ。娘はぶくぶく太ったったくせ、何をホラ吹かしとるんや。おかげで数字積み増さな、俺の首が飛びそうや」

ふいに立ち上がって、部屋の隅の箆笥に向かった。

引き出しを上から順に開けていく。中のものを片手でかき分けて、よく確かめずにまた閉める。それを繰り返した。

「何を探しとるんや」

「卒アル。忘年会で使うことになったから取りに来た」

湯呑みに手を伸ばしたが、茶はとうに冷めていた。

書類をかき分ける音だけが、しばらく部屋に響いた。

開けっ放しの戸口から、潮の匂いが畳の縁まで這ってきた。

海のほうで、汽笛とも風ともつかない音が低く流れた。

「お前さっきの話」

「おん」

「昔セミクジラの親子がおっての」

「その話はもうええ、夢中になって流されたってやつやろ。それ、何回聞いたらええねん」

「そや、ほぼ死んだ」

「あんな。そんなあほやったんか昔の人は。普通、槍離すやろ。それでしまいや」

「そんなこと考えれへんくなるんよ。夢中ってのは怖い」

「ほん」

「とつたらあかんもんが、おる。かどわかされるもの。追うてるんやない。いつの間にか、追われとるほうになつとる。お前が今やってることってのは、そういうやつなんちやうんか」

倅の子は箆筒に手を入れたまま、動きを止めた。

背中はこちらを向いて、顔は見えない。

夕日が丸めた肩の輪郭だけをふちどつとつた。

窓の外、藍に沈みかけた湾に、舟が一艘もやってあった。

もう誰も乗らない舟だった。舳先が、引いていく潮にあわせてゆっくりと向きを変えていた。

「もうくじら捕りなんて誰もやつとらん。それに、じいちゃんの時代よりもつと前の話やろ。そんなこと言われても分からんわ」

箆筒の引き出しが、鈍い音を立てて閉まった。

ようやくアルバムを見つけたらしい。

色の褪せた表紙を引っ張り出して、埃を手の甲でぞんざいに払った。立ち上がる時、膝がぱきりと鳴った。海のほうはもう、赤から藍に変わりかけていた。

「じいちゃんは最近なにしとるんや」

「何もしてないね」

「そうか」

「船降りてから何年や」

「もう分からん」

「なんか始めたら」

「やることもないわ」

「そうか」

「そうや」

「また来るわ」

「そうか」

扉が閉まった。

ガタンと閉じた。

土間に、揃わないまま空いた場所があった。

払われた埃が、西日の名残のなかをまだ舞っていた。